の形が異なり，花序に突起状の退化花を多数生じる点で異なっている（Tab. 1）。

2) *Arisaema lobatum* とヒロハテンナンショウ *A. ovale* var. *sadoense* には倍数体が観察された。後者の場合，従来報告のあった本州・九州産のものは X＝13 の4倍体，稀に2倍体または3倍体であるのに対し，新たに観察された北海道産の3資料はすべて 2n＝65 で X＝13 の5倍体と推定された。

3) カラフトヒロハテンナンショウ *Arisaema sachalinense* は 2n＝56 で X＝14 の4倍体と考えられ，本種がヒロハテンナンショウ（X＝13）よりもアムールテンナンショウ（X＝14）に近縁であるという外部形態上の結果（Murata 1986）を支持している。

---

□ 上野益三：**博物学の時代** 276 pp. 八坂書房，東京. ¥3,000. 本書は3部からなり，第1部は「だれも書かない博物学」と題し，副題に「近世日本植物学史要」とあり，記事は100ページに近い。「肩肘張った形式的な史書を目差すのではな」く，「私の書きたい植物学史を自由な形式で述べたいだけである」という。「原稿は七，八分通りできたが」，突然の博士の逝去で本記事は中断された。しかし博士自身の予定表を拝見すると，その後の記事は博士の他の記事から推測され，一応完成している。第2部の「江戸博物学のロマンチシズム」他6篇は，最後の収録の「関西博物学史散策」以外は書き下しである。第3部は荒俣宏氏と河合雅雄氏との対談の2篇の再録である。木村は先に本誌第65巻第1号に上野博士に関する記事を書いたが，その最後で紹介した「楽しみながらやればいい」の記事が本書に再録されている。また，この記事に木村は筆がすべって，「雑録などに書かれた博物史関係の記事を集めて次の三冊の著作があいついで出版された」と書いたが，これは誤で，『草を手にした肖像画』は29：5，『忘れられた博物学』は22：0，『博物学の愉しみ』は16：7である。この数字の前は書き下しの編数，後の数字は再録の編数である。ここに亡くなられた著者，出版者，読者におわびする次第である。それにしても，昔流に言えば90歳での生涯の最後まで筆をとられた上野博士の意力に驚嘆せざるを得ない。　　（木村陽二郎）